

第15回 第2章 武家社会の形成と生活文化のめばえ

## 室町時代の交易と文化

執筆・講師  
楠木 武

### 学習のねらい

室町時代の日本は、遣唐使の廃止以来途絶えていた中国との国交を復活し、朝鮮とも国交を結ぶ。一方、琉球は、東アジアにおける交易の結節点として繁栄する。蝦夷ヶ島で独自の文化を築いていたアイヌ民族を含め、東アジアの交易や国際関係はどのように展開し、相互に影響を与えていたのだろうか。室町文化の展開とあわせて、当時の様子をのぞいてみよう。

### 倭寇と日明・日朝貿易

日本で南北朝の内乱が続いていた14世紀後半、対馬・壹岐・肥前松浦地方など東シナ海域に暮らす人々を中心とする海賊集団が、朝鮮半島や中国大陸の沿岸をしばしば襲撃した。彼らは倭寇と呼ばれて恐れられた。

中国では、1368年に明が建国された。明は海禁政策をとって中国人商人の海外渡航を禁じるとともに、日本に朝貢と倭寇の禁圧を求めた。1401年、足利義満が明に使者を派遣すると、明は義満に「日本国王」の称号を与えて皇帝の臣下として位置づけ、朝貢形式による日明貿易が開始された。日本からは刀剣や銅・硫黄などを輸出し、明からは銅銭をはじめ生糸・絹織物などが輸入された。日本が派遣する船は、明から交付された勘合と呼ばれる証明書の持参が義務づけられたことから、日明貿易を勘合貿易ともいう。

朝鮮半島では、1392年、李成桂が高麗を滅ぼし朝鮮を建国した。朝鮮もまた通交と倭寇の禁圧を日本に求め、義満もこれに応じたので、両国の間に国交が開かれた。朝鮮は1419年に倭寇の根拠地であった対馬を襲撃する(応永の外寇)一方、1443年には対馬の宗氏とのあいだに貿易船の数を制限する癸亥約条を結ぶなど、貿易の統制をはかった。貿易港も富山浦(釜山)など3港(三浦)に限定した。三浦には倭館が置かれ、多くの日本人が定住した。日本からは銅・硫黄などを輸出し、朝鮮からは木綿や麻布などが輸入された。

### 琉球と蝦夷ヶ島

琉球では、北山・中山・南山の三つの王国(三山)が分立して争っていたが、1429年に中山王の尚巴志が三山を統一して琉球王国を建てた。琉球は三山の時代から明に朝貢しており、海禁政策をとる明にとっても重要な貿易相手であった。そのため明は、琉球に大型船や外交ス

タッフを提供するなどの優遇措置をとり、琉球との貿易の発展に期待した。

琉球王国は、明や日本・朝鮮などの東アジア諸国だけでなく、東南アジア諸国とも貿易を行ったため、王国の都首里の外港である那覇は重要な国際貿易港となった。首里城の正殿にかけられた「万国津梁之鐘」には、「船をもって万国の架け橋となる」という銘文が刻まれており、中継貿易によって繁栄した琉球の様子を今に伝えている。

蝦夷ヶ島では、アイヌ民族が広大な自然の中で狩猟や漁労を営んでいた。14世紀ごろから、本州出身の和人たちが蝦夷ヶ島に移り住むようになり、本土の鉄器や米・茶・酒などとアイヌの人々の魚や毛皮などとの交易を行った。志苔館から発掘された37万枚余りの銅銭は、当時の盛んな交易の様子を物語っている。

しかし、和人の進出は、次第にアイヌの人々を圧迫するようになる。15世紀中ごろに大酋長コシャマインが蜂起するが、敗北した。以後、蠣崎氏（のちの松前氏）が蝦夷ヶ島南部の支配者に成長していった。

## 室町文化

室町時代には、まず南北朝文化が生まれた。南北朝の内乱の中で成長してきた武士がもつ、既成の権威をものともしない奔放で新しもの好きな気質は、派手・ぜいたくを意味する「バサラ」の風潮を呼び、室町文化が形成される背景となった。

3代将軍足利義満の時代には、公家文化の伝統や禅僧がもたらした中国文化と武家文化が融合した北山文化が生まれた。義満が北山に建てた鹿苑寺金閣は、この時代の特徴をよくあらわしている。民間の芸能である猿楽や田楽に源流を持つ能は、義満の保護を受けた観阿弥・世阿弥父子によって芸術性が高められ大成された。能のあいまに演じられる狂言は、当時の話し言葉を使った喜劇であり、庶民文化の開放的な雰囲気を伝えている。

8代将軍足利義政の時代には、簡素と幽玄を尊ぶ東山文化が発展した。義政が東山に建てた慈照寺銀閣の下層や東求堂同仁齋は、その後の日本風住宅のもととなる書院造を代表する建物である。禅の精神を示す水墨画は、書院造の空間を飾るものとして好まれ、雪舟らが活躍した。また、茶の湯や生け花、枯山水の庭園などの発達もみられた。これらの多くは、後世、日本の伝統文化の代表格と評されるようになるのである。